

〔論文〕

## 乳がんから学ぶ道徳科の教材および授業提案

——女性性への理解を背景とした内容項目B8「友情, 信頼」とA1「自主, 自律, 自由と責任」——

天 野 幸 輔

名古屋学院大学外国語学部

### 要 旨

がん教育における「特別の教科 道徳」の可能性を追究すべく、乳がんを素材とする教材を提案するとともに、その授業を構想した。女性特有のがんとして、がん教育の目標を達するうえでの問題点を論考した。内容項目（B8）にある道徳的価値を高め、女性性や二重の喪失に気づかせるとともに、がん患者と共に生きる社会づくりへの実践意欲を高めることを授業の目標とした。また乳がん患者の情報源の問題から、メディアリテラシーや情報モラルを考える授業（A1）も構想した。

キーワード：がん教育, 「特別の教科 道徳」, 乳がん, 女性性, 二重の喪失

## A proposal to junior high school for moral class with teaching materials about breast cancer

——Understanding femininity and virtues; reliance and liability——

Kohsuke AMANO

Faculty of Foreign Studies  
Nagoya Gakuin University

## 1. 問題の所在

国立研究開発法人国立がん研究センターの統計（表1）によれば、2018年における部位別の女性のがん罹患数第1位は乳房<sup>1)</sup>である。

表1 がん罹患数の順位（2018年）

	1位	2位	3位	4位	5位	
総数	大腸	胃	肺	乳房	前立腺	大腸を結腸と直腸に分けた場合、結腸3位、直腸6位
男性	前立腺	胃	大腸	肺	肝臓	大腸を結腸と直腸に分けた場合、結腸4位、直腸5位
女性	乳房	大腸	肺	胃	子宮	大腸を結腸と直腸に分けた場合、結腸2位、直腸7位

出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)

では女性のがん罹患率における乳がんの順位付けた数値データは、どのようなものだろうか。図1は部位別のがん罹患率（1年間に人口10万人あたり何例がんと診断されるか）をグラフ化<sup>2)</sup>したものである。

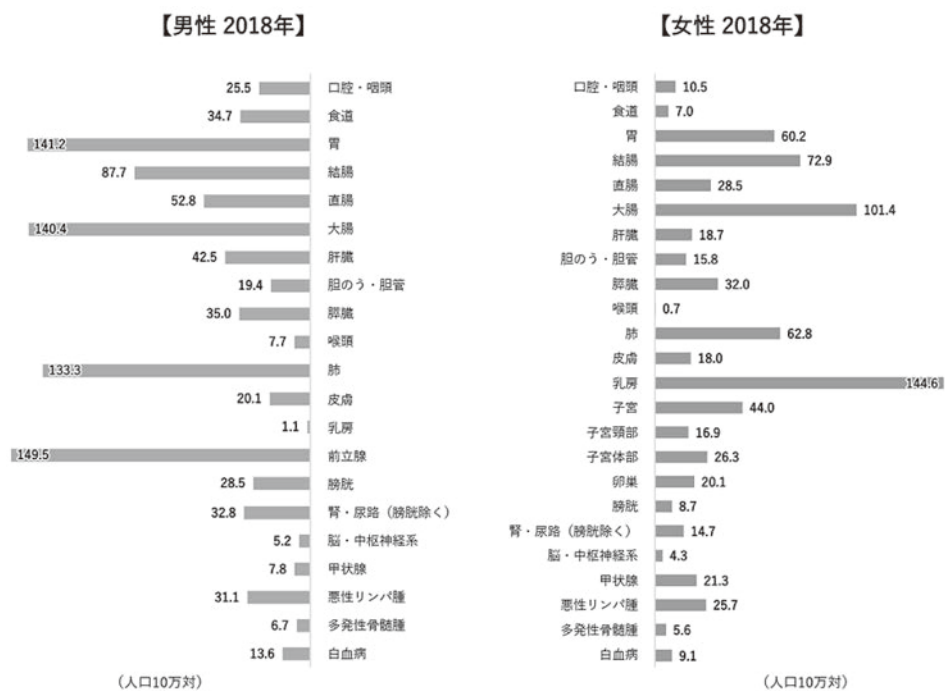


図1 部位別がん罹患率（2018年）

出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)

学校教育におけるがん教育を想定すると、表1で確認した順位からはどのようなことが考えられるだろうか。男性では、男性に特有のがんである前立腺がんが1位である。一方で女性の場合は、女性特有のがんである乳がんと子宮がんが1位と5位を占めている。つまり学級で乳がんについて学ぶことで、女子生徒は女性の抱える問題として子宮がんやその他の女性特有のがんや病気に学習の幅を広げやすい。男子生徒は自身の性へと関心が進み、男性特有のがんへと学習の幅を広げやすいと言える<sup>3)</sup>。

さらに図1からは、女性のがん罹患率において1位の乳がんは、2位の大腸がんの約1.4倍とその高さが際立っていると言える。男性の1位である前立腺がんと2位の胃がんや3位大腸がんとの差は10ポイント以内に収まっている点と比較しても、注目に値する。卒業後と言わず、家族との生活を考えてみても、乳がんを教材として取り上げることが、その学習において生徒にとって有用感や切実感、切迫感をもたせることができるのである。

ではさらに女性特有のがん<sup>4)</sup>にしぼり、その中における乳がんの特徴の詳細を検討してみよう。表2は、累積がん罹患リスクのデータ<sup>5)</sup>を女性特有のがんを中心にまとめたものである。

表2 累積がん罹患リスク（2018年データに基づく）

部位	生涯がん罹患リスク(%)	何人に1人か
全がん	50.2	2
乳房	10.9	9
子宮	3.4	30
子宮頸部	1.3	76
子宮体部	2	50
卵巣	1.6	64

出典：国立研究開発法人国立がん研究センター がん情報サービス「最新がん統計」[1. 最新がん統計のまとめ]「3) がんに罹患する確率～累積罹患リスク」「累積がん罹患リスク（2018年データに基づく）」に基づき、筆者が抜粋して作成  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)

ここにも乳がんの特異性が示されている。女性特有のがんのうち、乳がんは圧倒的に罹患する可能性が高いということになる<sup>6)</sup>。ここから学校教育におけるがん教育で女性特有のがんを取り上げるとすれば、やはりまず乳がんが適当であると言えるだろう<sup>7)</sup>。

がん教育は「がん教育は、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である。」と定義されている<sup>8)</sup>。つまり単なる科学的、客観的事実や知識を伝達することのみを目的としていないことは、明らかなのである。がん患者全般の傾向として、検査及び治療技術・機器や薬剤の進歩もあり、完治以前に「治療をしながら働く」といった社会参画を続ける人も増えているようである。そのことを勘案しても知識のみではなく、がん患者への「共感的な理解」やがん患者と「共に生きる社会づくり」に

つながる教育が、今まさに必要とされているのである。

では乳がんの生存率はどうであろうか。部位別のがん5年早退生存率<sup>9)</sup>を、女性に特有のがんを中心にまとめたものが表3である。

表3 部位別がん5年相対生存率（2009～2011年女性）

部位	5年相対生存率（%）
全部位	66.9
乳房	92.3
子宮	78.7
子宮頸部	76.5
子宮体部	81.3
卵巣	60

出典：国立研究開発法人国立がん研究センター がん情報サービス「最新がん統計」[4. がんの生存率][1] 5年相対生存率)に基づき、筆者が抜粋して作成。同サイトにあるように「100%に近いほど治療で生命を救えるがん、0%に近いほど治療で生命を救い難いがんである」。  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)

全部位においては7割弱である中、乳がん患者は9割以上が該当している。ここから乳がん患者が、例えば手術療法、化学療法、内分泌療法、あるいは放射線療法等を駆使しながら、様々な形で社会とのつながりを維持している様子が想像されるのである。おそらくその詳細までは授業で取り上げるとは難しいだろう。しかし問題の存在とその解決の重要性を知り、さらに知ろうとする態度の育成、支援や援助を越え、協力してよりよい社会づくりへと目を向ける機会を、生徒に与えることは必要であろう。

では、乳がんの治療の過程で、例えば手術療法を選択した人はどんな問題に突き当たりそうだろうか。乳がんにおいて「手術療法は現在でももっとも確実な局所療法であり、根治を目指す初期療法においては、非常に重要な治療法である<sup>10)</sup>。」とされる。9割以上の患者が5年の生存率を有している。退院後の生活の充実、さらに社会復帰を図って様々な行動をとっていることだろう。手術療法を選択した患者にとって、社会復帰のうえで大きなストレスとなるのが、ボディイメージの変化である。

乳房を対象とする手術には、大きく分けて乳房切除術（乳房全摘術）と乳房部分切除術（乳房温存術）がある。近年は、術後の乳房再建を前提にした様々な方法も試みられている。つまりそれらは、元来所有する乳房に対する女性のボディイメージからのニードであり、そのことを配慮した技術の進化とも理解され得るものである。

では学校教育でのがん教育において、乳がんをあつかうとすると、その枠組みとしてどのような教科・領域等が想定されるのであろうか。その答えとして、特別活動での学校行事や生徒会・委員会活動による外部講師を招いての大きな授業ではなく、また総合的な学習の時間のように、探究の構想に従って数時間を継続的、あるいは集中的に投入する授業ではなく、1単位時間完了で、生徒の日

常を校内で最もよく知る学級担任による授業として、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と表記）を考えたい。学習指導要領（平成29年告示）にしたがって、保健体育科でがんの基礎的な知識などを学んだ後、様々な種類がある中、乳がんの特化して学ぶ授業を想定する。その場合、前述のがん教育の定義にある「共感的な理解」「共に生きる社会づくり」等につながる教育として、道徳科はどのような点で有効と考えられるのだろうか。またさらには、そこでの学びを具現化する教材には、一体どのようなものが想定されるのであろうか。

周知・徹底、先行実施期間を経て、2020年小学校全面実施、2021年中学校全面実施の段階に入ったがん教育に関して、具体的な1単位時間の授業レベルでの議論を深め、授業者（おそらくは学級担任）が自分の個性を生かしたよりよい授業の実現や、研究委嘱校などによる先行実施の成果から個々の学校での実践に歩を進めることが求められる。現場の実践への提案でもあり、実践前後の批判的な検討や研究の場が一つでも多くなるよう、本稿においては、複数の教材を具体的に提案することとする。また本稿においては、道徳科を取り上げる観点から、また異性に関する学びを想定する観点から、中学校段階を想定して論考することとする。

## 2. 教材化の観点から見た乳がんの特徴

文部科学省による「がん教育」の在り方に関する検討会は「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」（以下、「在り方報告」と表記）において、がん教育の目標を以下のように定めている<sup>11)</sup>。

### ①がんについて正しく理解することができるようにする

がんが身近な病気であることや、がんの予防、早期発見・検診等について関心をもち、正しい知識を身に付け、適切に対処できる実践力を育成する。また、がんを通じて様々な病気についても理解を深め、健康の保持増進に資する。

### ②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする

がんについて学ぶことや、がんと向き合う人々と触れ合うことを通じて、自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え、共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する。

では、学校教育でのがん教育において、ことに中学校における道徳科の教材化の観点に立った時、乳がんの特徴とは何だろうか。

### 2.1 女性特有の病気であること

大部分の生徒が思春期にある中学校での授業に当たって、教材がどちらかの性にも関わらず問題を扱うことの意義は大きい。なぜなら学習するうえで、異性の存在を意識せざるを得ないからである。女性特有の病気を学ぶことは、男子生徒にとってはそもそも異性についてより深く知ることである。自分とは違った構造を有する肉体と、それに起因する悩みを有する異性の存在を意識することになる。女子生徒にとっては、学習内容から、またその場で男子生徒と学ぶことから、異性から見られている

自分や、男性からの女性一般像に気付くことになる。

保健体育科の保健分野での授業においては、男女別で身体の発育・発達、思春期における生殖に関わる機能の成熟に関する内容が、男女別で行われることがある。しかし道徳科においては、授業が学級全体で行われる点で異なる。しかも意見交流が行われ、異性の意見や、同性であっても異なる価値観を背景とした意見に出会うことができる。単なる知識にとどまらないのである。

では道徳科における異性に関する学習には、どのような特徴があると考えられるのであろうか。

#### 2.1.1 保健体育科との比較から —教科横断的な見地からの考察—

「中学校学習指導要領(平成29年告示)」第2章各教科,第7節保健体育,第2各学年の目標及び内容,〔保健分野〕2内容,において異性に関する学習内容が示されている<sup>12)</sup>。

(2) 心身の機能の発達と心の健康について、課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 心身の機能の発達と心の健康について理解を深めるとともに、ストレスへの対処をすること。  
(略)

(イ) 思春期には、内分泌の働きによって生殖に関わる機能が成熟すること。また、成熟に伴う変化に対応した適切な行動が必要となること。

(略)

さらに、同〔保健分野〕3内容の取扱い、では上記について留意点が示されている<sup>13)</sup>。

(7) 内容の(2)のアの(イ)については、妊娠や出産が可能となるような成熟が始まるという観点から、受精・妊娠を取り扱うものとし、妊娠の経過は取り扱わないものとする。また、身体の機能の成熟とともに、性衝動が生じたり、異性への関心が高まったりすることなどから、異性の尊重、情報への適切な対処や行動の選択が必要となることについて取り扱うものとする。

保健分野でのこうした内容は、教科の目標を設定した三つの柱である「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」では、どのように整理されるのだろうか。「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編」には、図2が示され、文章でも詳説されている<sup>14)</sup>。

図2において、学習指導要領からの上記の引用部分が、学習指導要領解説において、置き換えられて説明されていることが理解できる。それはつまり「ア 心身の機能の発達と心の健康について理解を深めるとともに、ストレスへの対処をすること。」が「ア 知識及び技能」に、「(イ) 思春期には、内分泌の働きによって生殖に関わる機能が成熟すること。また、成熟に伴う変化に対応した適切な行動が必要となること。」が「(イ) 生殖に関わる機能の成熟」に、といった具合である。

では文章ではどのように表現されているのだろうか。図2の後に引用する(引用元は注14と同じ)。

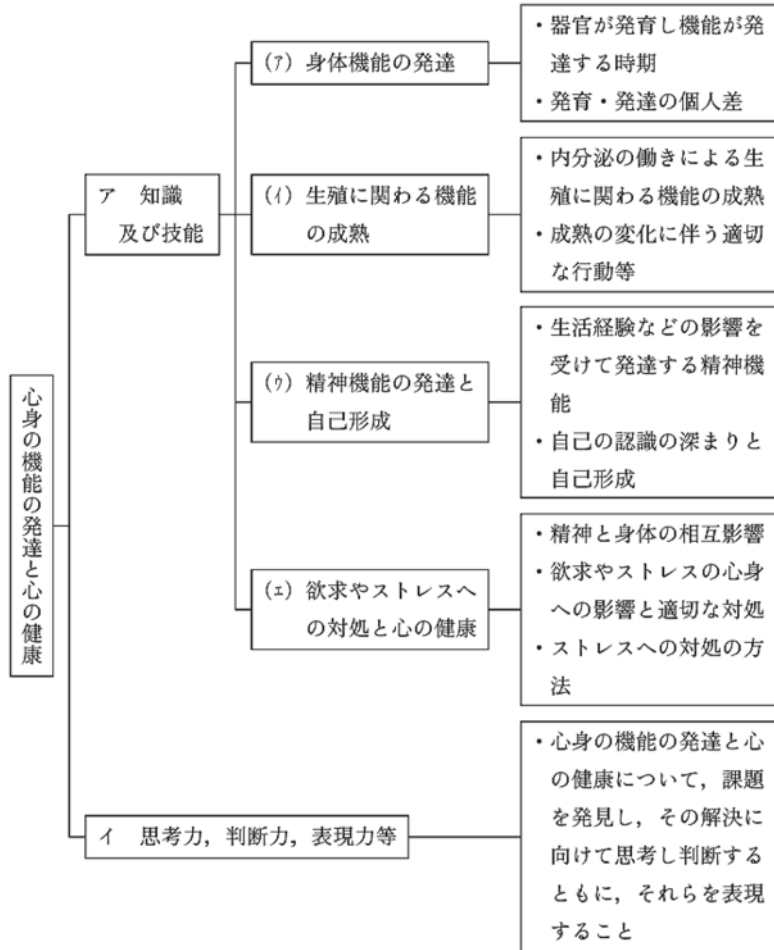


図2 [保健分野] 2 内容, (2)心身の機能の発達と心の健康

## ア 知識及び技能

### (イ) 生殖に関わる機能の成熟

思春期には、下垂体から分泌される性腺刺激ホルモンの働きにより生殖器の発育とともに生殖機能が発達し、男子では射精、女子では月経が見られ、妊娠が可能となることを理解できるようにする。また、身体的な成熟に伴う性的な発達に対応し、個人差はあるものの、性衝動が生じたり、異性への関心などが高まったりすることなどから、異性の尊重、性情報への対処など性に関する適切な態度や行動の選択が必要となることを理解できるようにする。

なお、指導に当たっては、発達の段階を踏まえること、学校全体で共通理解を図ること、保護者の理解を得ることなどに配慮することが大切である。

これら学習指導要領とその解説からの引用部分からは、異性に関する学習内容について、以下の点が指摘されよう。

- ①学習内容が「知識及び技能」に分類されている。
- ②〔保健分野〕2内容、(2), アにあるように、具体的な内容である(イ)は「理解」とともに「(ストレスへの)対処」の文脈で示されており、上記①を支持している。
- ③がん教育の目標に照らすと、①「がんについて正しく理解することができるようにする」に該当する部分が多いと考えられる。
- ④その指導においては「発達の段階を踏まえること」とされている。

では、道徳科において異性に関する学習はどのような特徴を有すると考えられるであろうか。「中学校学習指導要領(平成29年告示)」第3章特別の教科 道徳、第2内容において異性に関する学習内容について記している<sup>15)</sup>。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要である道徳科においては、以下に示す項目について扱う。

## B 主として人との関わりに関すること

### [友情, 信頼]

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。

さらに詳細を学習指導要領解説で見よう。内容項目「B8 友情, 信頼」において、異性に関する部分は以下のように説明されている<sup>16)</sup>。

#### (1) 内容項目の概要

(略)

「異性についての理解を深め」とあるのは、互いに相手のよさを認め合うということである。相手に対する理解を深め、信頼と敬愛の念を育み、互いを向上させるような関係を築いていかなければならない。独立した一個の人格としてその尊厳を重んじ、人間としての成長と幸せを願うという点において、異性間における相互の在り方は基本的に同性間におけるものと変わるところがない。

(略)

#### (2) 指導の要点

小学校の段階では、特に高学年で互いに信頼し学び合って友情を深め、異性への正しい理解



とともによりよい友達関係を築くよさについて学習している。

…また、性差がはっきりとしてくる中学生の時期には、異性への関心が強くなるとともに、意識的に異性を避けたり、興味本位の情報や間違った理解から様々な問題が生じたりすることもある。指導に当たっては、まず、友情は互いの信頼を基盤とする人間として最も豊かな人間関係であること、互いの個性を認め、相手への尊敬と幸せを願う思いが大切であることを理解させたい。…異性であっても、相手のものの見方や考え方を理解するなど、友情を築き、共に成長しようとする姿勢が求められる。各自の異性に対する姿勢を見直すきっかけとなるよう指導することも必要である。相手の内面的なよさに目を向け、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係のよさを味わわせたい。また、友情を培うために自分はどうかあればよいか、友情とは何か、などについて発達の段階に応じて意見を交換し合うなど、発展的な指導を心掛けることも重要である。

では、保健体育科の保健分野における異性に関する学習内容と比較することで、道徳科の特徴とはどのような点と考えられるであろうか。それは、例えば次のような点ではないだろうか。

- ①身体の発達や変化ではなく、「友情」「信頼」という道徳的な価値や内面の問題としてとらえられている。
- ②内容項目B「主として人との関わりに関すること」に分類されているように、相手との関係や関係性からとらえている。
- ③関係性からとらえることを通して、「男女の違い（異性間）」よりも、「同じ人間（同性間におけるものと変わるところがない）」として考えさせようとしている。
- ④「悩み」や「葛藤」を前提として「人間関係を深めていくこと」を最終的な目標としている。
- ⑤がん教育の目標に照らすと、②「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」に該当する部分が多いと考えられる。
- ⑥発達の段階を考慮する点は同じであり、さらに道徳科では「発展的な指導を心掛けることも重要」とされている。
- ⑦異性に関する「情報」を問題としている点が共通する。

上記の①～④を通じて、道徳科の授業において、内容項目に示されている道徳的な価値を高める授業を行うことになる。異性について、保健体育科が知識や理解、また技能にかかわることを内容とし、道徳科が内面や価値に関わる部分に多くかかわっている。しかしここでは、知識という具体的な問題から、より広く、抽象的な価値へといった単純、一方向な流れの学習が想定されていないだろう。まず個々の学校の教育目標を実現したり、学校経営案に沿った教育課程を実現したりする文脈が存在する。その中で異性に関する理解や関係性を深めたり、価値を高めたりすることを目指すカリキュラム・マネジメントから、学習の流れを順序だてたり、学習内容の往還を図ったりされることで、実現が図られるものであろう。さらには学級活動「内容(2)」での学習、さらには、朝の会や帰りの会で

の教師からの話から発揮される生徒指導の機能など、重層的、かつ合科的に、時には集中的に教授されるべき内容である。

上記⑤から、がん教育の目標②については、女性特有のがんである乳がんの教材化を構想するにあたり、とりわけ「自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え、共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する」部分への道徳科の関連が、内容項目と保健体育科の内容との比較によって考えられると言えよう。「自他」という表現は「人との関わりに関すること」にふさわしい。「悩みや葛藤も経験しながら」とは、「自己の在り方や生き方を考え」る姿勢とは言えないだろうか。「(異性についての)理解を深め、人間関係を深めていく」ことは、「(異性と)共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する」ことではないだろうか。

すなわち「乳がん」を通じて男性は女性を理解し、女性は男性に対して自らを語る言葉を作り、磨いていくということだろう。そのことはまさにそのまま上記⑥と⑦に重なっていく。

このことはつまり、乳がんについて道徳科で学ぶことによって、自分のもつ価値を仲間と考え議論することで高め上げ、さらに将来のあるべき姿に向けて、今現在の人間関係を振り返ったり、参画する社会を変えていこうとしたりする態度の育成までを目論んでいく、ということなのである。そして身につけた知識や技能をもとに、的確な教材や教師による十分な指導が加わることで、情報の意義やその真偽を見抜く力も育成されるだろう。自分とは異なる価値をもった多くの意見に出会うことで、生徒は異性や性そのものを多面的、多角的に見つめ、分析する能力を得る、とも表現しうるだろう。

乳がんについて学ぶことは、保健体育科と道徳科の連携が不可欠とも言い得るほど、がん教育の目標を実現する上でも補完し合う部分が多いのである。そして当然のことながら、補完し合うことで、他方のみでは達しえない目標の実現が図られるのである。

### 2.1.2 新旧学習指導要領の比較から 一教科縦断的な見地からの考察一

中学校学習指導要領(平成29年告示)により、内容項目の構成と、その内容そのものが変更された。前回の指導要領との比較から、道徳科における異性に関する学習とその指導について、留意すべきことは何だろうか。

平成20年3月告示(平成22年11月一部改正)された中学校学習指導要領において、授業による道徳は、教科ではなく領域であり「道徳の時間」と称していた。「徳目」が「内容項目」と名称を変えた。現在の「友情、信頼」ように、「その内容を端的に表す言葉を付記した」「見出し」<sup>17)</sup>にあたるものはなかった。その内容項目の中であって、異性について学ぶ内容が2-(4)として特設されていた。本稿とかかかわると考えられる2-(3)と合わせて、その内容は以下の通りであった<sup>18)</sup>。

#### 2 主として他の人とのかかわりに関すること。

(略)

(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。

(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。

(略)

つまり大づかみには、平成20年告示の学習指導要領の内容項目2-(3)と2-(4)が、平成29年告示の学習指導要領において、内容項目「B8 友情, 信頼」に変更されたと考えられるだろう。このことは、小学校と中学校の学習内容の体系的性を高めるなどの理由での変更<sup>19)</sup>により、24から数を減らした中であっても、異性をめぐる関係性についての価値に関する学習が、削ることのできない内容と評価されたととらえるべきであろう。つまり単独の内容項目とされなくなったが、内容そのものまでは削除できないことが明確化されたのである。道徳科の内容項目における異性に関する理解・学習が、逆に存在感が増したと理解するべきである。

では異性に関する理解に関する内容が、「友情, 信頼」の枠組みに入れられたねらいはどこにあると考えられるであろうか。あるいは仮に、2つの内容項目が一体化されたという見方が正しいとして、その前後で変えられていない部分はあるのだろうか。

まず「友情, 信頼」の文脈で異性の理解・学習を示す必要があるため、片方の内容項目にのみ該当する社会に対する現状認識が記されなくなった。内容項目2-(4)の解説の冒頭には、以下の部分が示されていた<sup>20)</sup>。

今日、男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が平等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会の実現が求められている。互いに異性についての正しい理解を深めることは、互いに相手のよさを認め合うということである。

その点、平成29年告示の学習指導要領解説は、友情と信頼に関する解説から始まっている。そして異性に関する理解や学習に関わる部分の説明が加わる部分の初めには、以下のように記されている<sup>21)</sup>。

「異性についての理解を深め」とあるのは、互いに相手のよさを認め合うということである。相手に対する理解を深め、信頼と敬愛の念を育み、互いを向上させるような関係を築いていかなければならない。

2つを比べると、社会の要請に向けて異性の理解やよさを認め合うことを促進する内容から、未来に向けて正しく理解し、よさを認め合うことそのものが大切といった内容に変化した印象を受ける。がん教育における教材を構想する点において、このことはどのようにとらえられるべきなのであろうか。

それはがん教育の目標で述べれば、「共に生きる社会づくりを目指」して、まずは異性について理解していくための学習を行う。そして未来ばかりを意識するのではなく、実際に実現していくために十分な資質を養うべく、異性と今の現在の関係や関係性について振り返る学習にもしていく、ということではないだろうか。それは、内容項目が示す道徳的な価値にしたがって、社会にある矛盾や気付かぬところで苦しんでいる人を教材として学びつつ、現在の自分の在り方と他者との関係性やその在

り方を問う授業、とも表現もできるだろう。では「異性と今現在の関係や関係性について振り返る学習」とは何だろうか。

それはがん教育の目標に引き付けられれば、「自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え」る学習ということになるだろう。まず自分のことを大切に思えない限りは、他者の大切さ気付くようがない。そのことを、がん教育に関わる横断的な教科・領域の学習やその他の教育課程全体で学ぶ。さらに異性について学ぶことで、男性は女性との比較において男性である自分について、その在り方や生き方を考えるということであろう。女性は女性特有の病気から女性である自分について掘り下げることで、自らを異性に語れる言葉を磨くような生き方や在り方を考えるということであろう。つまり遠い先（に思えてしまう）である社会に参画する未来に向けて、という視点ばかりではなく、日々の異性と学校生活において自分を見つめ直す教材が必要であり、そのような視点をもつ授業展開や指導が求められるということなのである。

学習指導要領平成20年告示の解説と平成29年告示の解説において、唯一全く同じ文章が存在する（前掲の引用部分中のものを再掲）。

独立した一個の人格としてその尊厳を重んじ、人間としての成長と幸せを願うという点において、男女間における相互の在り方は基本的に同性間におけるものと変わるところがない。

相手を「独立した一個の人格としてその尊厳を重んじ」というのは、中学生にはその意義の理解だけでも難しいことと言えよう。「人間としての成長と幸せを願うという点」には、「今現在の状況だけではなく、この先の人生においても」といった印象を受ける。そしてこれらのことが「同性間におけるものと変わるところがない」というところから、未来に向けて異性について学び、理解することを通じて、異性と関係や関係性の現在の在り方を振り返り、同時に同性の友人との関係や関係性も振り返ることが期待されている、ということであろう。つまりこの文言は、「友情」と「信頼」に「異性についての理解を同性との関係についての振り返りにつなげる役割を果たしている」と言えるだろう。

発展的な内容を含み、困難も伴うと考えられるこのことを実現するのは、ふさわしい教材の存在はもちろん、意義を掘り下げたところから実現する指導にも拠るところが大きいだろう。果たせるかな、前掲の29年告示の指導要領からの引用部分の最後に「また、友情を培うために自分はどうかあればよいか、友情とは何か、などについて発達の段階に応じて意見を交換し合うなど、発展的な指導を心掛けることも重要である。」とある。現代の社会を生きるうえで、内容項目が示す道徳的な価値について、発展的に「乳がん」という具体的な文脈の中で学ぶ場が求められている。

## 2.2 死亡率が増加している病気であること

がんには「不治の病」、ことに「死に直結する病」といった強いイメージが伴うと感ぜられる。では、その統計的な実際はどのようなのだろうか。

表4は「主要部位別の年齢調整率の近年の傾向<sup>22)</sup>」を示している。表4は出典である「国立研究開

発法人国立がん研究センター」のサイトの「がん情報サービス」,「年次推移」,「1. 年次推移のまとめ」に、全がんの傾向として以下の説明とともに掲載されている。

- がんの罹患数と死亡数は、人口の高齢化を主な要因として、ともに増加し続けている。
- 人口の高齢化の影響を除いた年齢調整率で見ると、がんの罹患は2010年前後まで増加しその後横ばい、死亡は1990年代半ばをピークに減少している。
- がんの生存率は多くの部位で上昇傾向にある。

このことと合わせて表4の乳がんを見ると、乳がんの特徴を理解できる。それはつまり年齢調整率から見た「罹患は、全がんと同じく横ばい傾向である」。その一方で年齢調整率から見た「死亡は、全がんでは減少しているが、乳がんは増加している」ということである。

このことは、治療法の開発が著しい乳がんをめぐる状況に関する、具体的に正しい知識の伝達の上で、価値を扱うより内面的で、抽象的な内容の道徳科の学習が積み上げられる必要があるということを示している。絶対的な治療法が見つかっていない病気に対して、ある程度の不安や恐怖を感じることは、むしろある意味で健康的でさえあるだろう<sup>23)</sup>。まずは科学的で根拠のある知識や事実が、授業

表4 主要部位別の年齢調整率の近年の傾向

罹患*	男性	増加	食道、膵臓、前立腺、悪性リンパ腫
		減少	胃、肝臓、胆のう・胆管、肺
		横ばい	結腸、直腸、大腸（結腸および直腸）、甲状腺、白血病
	女性	増加	食道、結腸、直腸、大腸（結腸および直腸）、膵臓、肺、子宮、子宮頸部、子宮体部、卵巣、悪性リンパ腫
		減少	胃、肝臓、胆のう・胆管
		横ばい	乳房、甲状腺、白血病
死亡	男性	増加	膵臓
		減少	食道、胃、結腸、直腸、大腸（結腸および直腸）、肝臓、胆のう・胆管、肺、前立腺、甲状腺、白血病
		横ばい	悪性リンパ腫
	女性	増加	膵臓、乳房、子宮、子宮頸部、子宮体部
		減少	胃、結腸、直腸、大腸（結腸および直腸）、肝臓、胆のう・胆管、肺、卵巣、甲状腺、白血病
		横ばい	食道、悪性リンパ腫

出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/annual.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html)

で取り上げられるべきであろう。

時間という物理的な限界を有する教育課程にあっては、知識として何を、どう与えるかが問題となる。学習内容に切実感や切迫感をもたせることは、ある意味で大切な場合があるが、そのことが無用な不安を生まないですむような配慮は必要であろう。そうであるなら、例えば「乳がんを予防すること（1次予防）は難しく、検診による早期発見（2次予防）が乳がんによる死亡を減らす最良の方法と考えられる<sup>24)</sup>」あるいは「遺伝以外の乳がんの要因は、はっきりと判明されておらず、生活習慣、とくに食生活や環境の関与が推定されている<sup>25)</sup>」といった個々の知識に、構造的に理解するための意味付けを与えるような高次の知識や情報は、教授の順番として優先されるべきであろう。

よりよい価値判断をなすためには、科学的で根拠のある情報や知識が不可欠である。さらに学ぶ側への配慮として、不安を不必要に感じなくても済むように、教授する知識の内容はもちろんであるが、配列や順番なども精査することが望ましいと言えるだろう。例えば文部科学省は、スライドデータなど多岐にわたる内容をホームページに公開している<sup>26)</sup>。授業者には簡便かつ、生徒には見やすく、わかりやすい図が付されており、様々な配慮が随所に見られる。スライド教材は、モジュールごとにその全てを使う必要はない。部位別に特化して利用することは想定されていないようであるので、教材研究を重ねて乳がんに適する利用が求められる。ぜひとも生徒の学びが深まるような、また不要な不安を生徒が抱かずに済むような工夫のある活用が望まれる。

## 2.3 5年相対生存率が高い病気であること

表3からすると、乳がん患者の5年相対生存率は9割を超えている。全部位や他の女性特有のがんと比べても、その高さは際立っている。このことは乳がんを教材化するうえで、どんな留意点を含んでいると考えられるのだろうか。

### 2.3.1 治療の終わりが近づくゆえの不安、社会復帰への不安

罹患しても生存期間が長いということは、社会復帰の機会が多いと考えられる。復帰とまではいなくても、改めて社会とのつながりをもったり、過去のつながりを再開したりする場合もあるだろう。つまり乳がんを教材化するということは、その点を女性ゆえの問題から掘り下げることでもあるだろう<sup>27)</sup>。

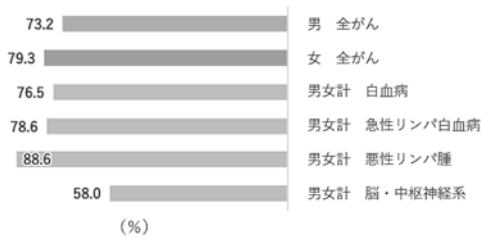
しかしがん全体において、生存率は高くなってきている点に鑑み（図3）、まずは退院直前、あるいは治療最終直前からのがん患者一般にみられる問題について概観していこう。

例えば、シングルでフリーランスの仕事をこなしながら、がんでの入院治療を経験し、治療後に父の介護が始まった岩井は、次のように記している<sup>28)</sup>。

しかし、治療の終わりと同時にすぐに本格的に仕事に復帰し、今後の生活のためには一分でも早く収入を得たいと思っている人の場合、治療が終わると同じくらい、社会復帰への大きな不安で、えも言われぬ恐れにさいなまれる人もいます。

休職扱いを受けていて戻れる職場やポストがある、そういう一見恵まれた人にとっても、「今まで通り働けるだろうか」「後れを取っていないだろうか」「周りの目は…」と考え始めると不

部位別がん10年相対生存率（ピリオド法）  
【0～14歳 2002～2006年追跡症例】



部位別がん10年相対生存率（ピリオド法）  
【15～29歳 2002～2006年追跡症例】

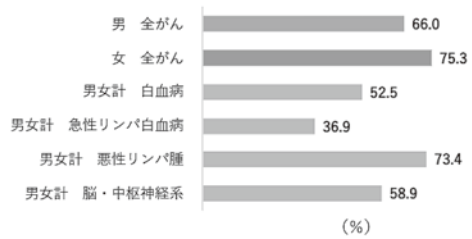


図3 部位別がん10年相対生存率（ピリオド法）

出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）  
[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)

安でたまらなくなるのではないのでしょうか。

そしてもっと深刻なのは、病気によってすべての仕事を失った人たちです。日本では残念ながら、がんになったことで仕事を失う、仕事を手放さざるを得ない人がたくさんいます。実際には働き盛りの年齢であるにもかかわらず、四〇代、五〇代の人の再就職への道は厳しいのが現実です。また「正社員になれるのかしら」「病気のことは面接で言うべきだろうか」「新しい職場では病院に行く日に休めるだろうか」「また病気になって休むことになったら、どうなるんだろう」…など、さまざまな思いが頭をよぎるはずです。

社会復帰以前から、すでに患者には悩みがある。そしてそれは「退院＝（手放しに）よいこと」という定式を暗黙のうちにもっている人には、想像しにくいことかもしれない。さらにはこの一つの記述からでも、社会の抱える矛盾や問題点をうかがい知ることができる。乳がんに限った問題ではない。職場体験学習やキャリア教育に教育課程を割く学校が増える中、収入をめぐる差し迫った問題は学ぶ意義を感じさせ、生徒の学習意欲を高めるかもしれない。

こうした点から、「中学校・高等学校版 がん教育プログラム補助教材」<sup>29)</sup>において、「モジュール7 がん治療の支援」「モジュール8 がん患者の思い」「モジュール9 がん患者と共に生きる社会」が参考になる。緩和ケアが終末期のものではなく（モジュール7）、治療時にも大きく役立つものであること（モジュール8）や、がんへの向き合い方が患者それぞれ違うこと、がん患者への接し方や仕事の面からの共に生きる社会づくり（モジュール9）は、読み物教材と組み合わせるなどして、スライド1枚からでも利用できる。乳がんに関する教材に進む場合でも、例えば「ここまではがん患者一般に当てはまることですが、ここからが乳がんゆえの患者の抱える問題ですね。」などと、より学習内容への焦点化を行う授業展開が可能となるだろう。

### 2.3.2 社会復帰にかかわる乳がんゆえの問題

この点については情報収集・情報利用の面と、ボディイメージの変化に伴う問題、家族の一員、役割の面から問題を指摘したい。

不治の病のイメージが強いがんにあっては、その患部の部位に関わらず、患者一般が手軽な情報収集手段としてインターネットを活用することは、想像に難くない。しかし乳がん患者にあっては、その動機に違いが見える。橋爪ら（2019）は「(情報収集内容は)ホルモン療法や、乳房再建に関すること、子供への遺伝など乳がん特有の情報も含まれており、セクシュアリティや妊孕性など、女性性に関することが患者の重要な関心事であることが明らかとなった。」とし、「乳がん患者は医学的情報のニーズだけでなく、女性性に関する情報のニーズを持ち、自身の問題に対処するための具体的な情報をインターネットから得ていた」と結論付けている<sup>30)</sup>。乳房は多くの女性にとって、女性としてのアイデンティティに関わる存在なのである。そのこともあって患者はより新しい情報を求めて、より簡便で迅速なインターネットを活用するのであろう。もしそうだとすれば、道徳科としての教材化を意識するとき、これらのことはメディアリテラシーや情報モラルの問題とあわせて指導できる内容と言える。

さらにそのことはボディイメージの変化に伴う問題につなげることができる。「治って命が助かったのだから、乳房ぐらい無くなってもいいではないか」といった安易な声がけは、一時的な退院をした患者や元患者の気持ちにはそぐわないことがある。そこには「二重の喪失」といったものが隠されているからである。それはつまり「乳房を喪失することは、身体の一部を喪失することであるとともに、女性性の喪失という大切な自分のアイデンティティの喪失」なのである。それは例えば、一人っ子を亡くすことは、「子どもその人の喪失」とともに「親である自分の喪失」を親に科すことでもある点と似ている。そのつらさは同じ「親」であっても、一人っ子の親でないと理解できない部分が存在するだろう。残された子どもがまだ他に存在することで、親である自分の全てを喪失したわけではないからだ。そのことは乳がんの文脈であれば、男子生徒は女性における乳房の意味をつかみにくいことを意味する。そこに対する教育の場が拓かれれば、女性は無理解からくる偏見に苦しまなくて済むことになるだろう。ここにおいて、異性に対する理解の中で乳がんを取り上げる意義が理解されるのである。

乳がん患者と家族の関係性や役割には、どのような問題があるのだろうか。

唐ら（2021）によれば、「母親の心理状態がよくなないと、子どものQOLが低下すると示された。…家族機能による子どものQOLに差異が見られたことから、子どものQOLを改善するために、母親としての役割を交代したり、母親以外に子どもの生活を支える人を確保することが大事であると考えられる。さらに、子どものきょうだいがいる場合と母親が化学療法を受けた場合、家族機能と母親の心理状態は子どものQOLに影響を与えていることが示された。…」<sup>31)</sup>という。

ここで留意すべきこととして、授業者による配慮の問題が挙げられる。そもそも家族の在り方は様々であることや、家族構成員間の関係性も多岐にわたることを前提に、生徒たちの家族背景をよく把握し、考慮して授業づくりを行うことだろう。それはつまり「…指導に当たっては、多様な家族構成や家庭状況があることを踏まえ、一人一人の生徒の実態を把握し十分な配慮を欠かさないようにすること」<sup>32)</sup>と言い換えられるであろう。乳がんを患う家族をもつ生徒が学級にいる場合、本人や他の生徒の発言をコントロールしきれないことが予想され、配慮しきれないと事前に判断することもあるかもしれない。その際には、同じ内容項目で別の教材を差し替えることも選択肢であろう。授業者に



よる生徒への配慮の質は、経験年数はもちろんだが、ことがん教育を想定するならば、教師その人の病気や入院の体験の有無や家族の状況など、特別な問題もかかわってくる。学級内の個々の生徒の事情を把握したり、先行実践に学んだりすることで、質の向上に努めたい。

### 3. 乳がんを教材とする道徳科の教材と授業の提案

以下の教材と、それをを用いた授業を提案したい。

#### 3.1 内容項目をB8「友情、信頼」とする授業

##### 3.1.1 教材の提案

###### 【二重の喪失】

「このたびの台風による豪雨では、大変でしたね。」

「はい…。さっ…。酒蔵のすべてがだめになったってことは、蔵っていう建物をなくしたってことだけではないんです…。ううう、6代続いてきた我が家の伝統もなくなりました。私は酒蔵で父や祖父の働きぶりを見て育ちましたので、その思い出も…なくなっちゃいました…。二度とは戻ってきませんや。」

確かにこの7月の雨はひどかった。テレビ中継のインタビューに対するすすり泣きに、両親もぼくも、思わず食事の準備の手を止めて見入ってしまった。

でもぼくは、どうもこうしたつらいシーンが苦手で、長い時間は見ていられないし、考え続けることができない。

3か月前に母の乳がんが見つかり、数回の検査のあと、あまりよくない状況とわかりすぐに入院。手術となったときも、母がいない10日はつとめておもしろいマンガやテレビ、動画視聴やゲームで考えないようにしていた。いつも小言が多い母も、まとめて長い期間、家になくとなると、なんだか落ち着かない日々だった。

明るい話題に変えたかったぼくは、母に向かって言った。

「豪雨で大変だった人が多かったね。この映像はなかなかキビシイ。その点、お母さんはよかったね、治ってさ。どうなるかって心配したよ。どうしてもがんって聞くとよくないことを考えちゃって心配なんだったんだよね。よかったねえ。治ったんだから、まあ片方の胸ぐらい取っちゃったところが、ってとこだよ。」

「え？ あ、あ、そうそう、そうね…。」

母は階段を早足で上がっていき、料理はため息交じりの父が続けた。

「ひげが生えて声も変わった。男だもんな、大翔（ひろと）も。母さん、助かったけど、変わっちゃったんだよ、いろいろな。これ大変なことだよ…。」

翌日は隣の席の芽依（めい）と女子の制服のことで言い合いになった。

「いやさ、困ってんならみんなズボンにそろえりゃいいじゃんか。何だよスカートだ、ズボンだって。何着たって一緒なんだよ。」

「大翔っていつもそうだよ。そこってホントに好きになれないね。私はスカートが好きなの。スカートがもってるイメージとか、ずっと着てきた私なりの歴史っていうかさ。スカートをはいている自分が好きなの、私は。それが私。」

「イメージってなんだよ。相手のもってるイメージなんて、毎回考えてられっかよ。」

「やっぱね、あんたが落として壊した筆箱、許すんじゃなかった。あーあ、あれってさ、古くてかっこよくなかったけど、引っ越した私の前の友達との思い出の品だったのに、あんたにゃわかんないね。あのね、ここまで言ってあげてるのは、一応あんたが友達だって、信頼してるんだから、言ってもらって感謝しなさいよ。ズボンの方が好きな人はそれでよし。どうにも寒けりゃ私もはきます。でもさ、スカートって単なるモノでもないと思うんだな。こう、なんて言いますか、私は女って感じる大事なアイテムさあ。」

(ああ、スカートで女が女って感じるってか。そういやあ、お母さん、ブラジャーみんな捨てちゃって、特別な買ったんだよなあ…。)

### 3.1.2 授業の流れ、構成の提案

◆**主題名** 尊重したい私の性とあなたの性

◆**教材名**

- 1 読み物教材「二重の喪失」
- 2 「がん教育推進のための教材 補助教材」スライド教材モジュール8の4枚目

◆**内容項目** B8 友情, 信頼

◆**ねらい**

- 1 女性特有のがん患者とその人が抱える悩みについて知ることで、現在の異性とのかかわりにおいて、信頼や友情について振り返ることができる。
- 2 異性である相手を正しく知り、信頼ある関係を築いていくことが、協力してよりよい社会づくりにつながっていくことに気付くことができ、その実践意欲をもつことができる。

◆**導入**

- 1 事前学級アンケート「どんな思い出の品をなくしたことがありますか。またその時、どんな気持ちを感じましたか」の結果を伝える。または「男子は、女子がどんなことに自分が女性だ、と感じていると思いますか。また女子は、男子がどんなことに自分が男子だ、と感じていると思いますか。」というアンケートでもよい。こちらの場合は、脱線しそうな回答内容は公表を回避したい。
- 2 1にあまり時間をかけ過ぎず、主題を提示して授業を方向付けたい。

◆**展開**

- 1 学習課題「乳がん患者の苦しみを想像して、現在の異性とのかかわりについて振り返ろう」を

提示する。

- 2 教材を範読する。
- 3 登場人物および教材の内容の確認をする。
- 4 課題について話し合う。

【発問1】料理を続ける父は、大翔にどんなことを伝えたかったのだろうか。

(補助発問：母の何が、どう「変わっちゃった」のだろうか)

【発問2】芽依の行動のどんなところに、大翔への信頼が感じられるだろうか。

(補助発問：芽依に「好きになれない」とまではっきり言わせるものは何だと思うか)

【発問3】大翔が異性（芽依や母）とのかかわりに関して、考えるべきこととは何だろうか。

(補助発問：乳がんなど、女性特有のがんに苦しむ人たちが住みよい世の中にするためには、どのようなことに気を付けるべきだろうか)

【発問4】乳がんの人が生きやすい社会とはどのようなものだろうか。

(補助発問：「治ったんだからそれでいいだろう」という考え方に欠けていることは何だろうか)

#### ◆終末

- 1 説話を行う（母が失ったものは「乳房」だけでなく「女性としてのボディイメージ（女性としてのアイデンティティのある部分）」であることを確認する。病気としての乳がんの現状を短く説明し、スライドモジュール8の4枚目を映写する。乳がん患者が社会復帰や社会参画を行えるようにするには、異性であるお互いをよく知り、信頼のうえにかかわりあえるように心がけることが大切であることを伝える。
- 2 授業の感想をワークシートに書かせる。

#### ◆評価

- 1 芽依や母は何を大切にしたり、何にいやな思いをしたりしているか気付くことができたか。（発問1と3に対する発言内容とワークシートへの記述内容から）。
- 2 異性とのコミュニケーションについて、信頼や友情の面から振り返るとともに、乳がん患者が住みやすい社会づくりへの実践意欲をもてたか。（発問2と4に対する発言内容とワークシートへの記述内容から）。

## 3.2 内容項目をA1「自主、自律、自由と責任」とする授業

### 3.2.1 教材の提案

#### 【情報は何のため】

現在、思春期の中にいるあなたは、自分の体のどんな変化に気付いているでしょうか。そして女子はその何に「自分は女である」と感じ、男子はその何に「自分が男である」と感じていますか。

女性がかかるがんで、最も多いのが乳がんです。現在では早く見つければ、治るようになってきましたし、治療しながら長く生きていく人も多いです。

まあそうは言っても、私のように乳がんや医師から告げられた者は、その直後にとにかく不安になります。そして少しでも詳しく、少しでも新しい情報がほしくなるのです。その不安とは、どのがんにも共通の「自分がかんで死んでしまうのではないか」「仕事がなくなるのではないか」「家族に迷惑をかけるのではないか」というものもあります。でも、乳がんの場合は別の不安がつきまといます。それは「乳房を取らなくてはならないのではないか」、また「乳房を取ることで、将来自分が子どもを自分の母乳で育てられないのではないか」とか、「乳房を取ってしまったら、女性としての価値が下がったように周囲から見られるのではないか」といったものなのです。

男子のみなさんは「わからない」と思ったり、中には笑ってしまったりする人もいるかもしれません。でも女性にとって乳房は、思春期に入る少し前から少しずつ、少しずつ変化し、ふくらみを帯びていく、大切なものなのです。私が女性であることを、例えば下着を変えるとき、お風呂に入るとき、鏡を見るとき、意識しているとしていないとに関わらず、いつでも感じさせてくれているものなのです。

主治医の先生は、いつも私にかかりきりとはいきませんので、聞きそびれたことも含めて、知りたいことはひたすらスマホやPCで検索し続けます。平均的な入院日数や入院費用、手術費用、手術時間、手術後の回復時間や患部の外見、乳房再建術の種類と術後や経費、手術の成功確率、手術以外の方法、薬の種類と副作用…、もう気になって仕方がありません。

やっぱりスマホは手軽です。次々に検索でき、大部分の欲しかった情報が瞬時に入ってきます。自分によく似た症状の人の体験談を見つけたりすると、少し安心できます。ちょっと先にどんなことが待ち受けているのか、見通しをもてたりもします。1日5時間以上、画面を見続けることもありますね。

しかしその反面、いやな思いもします。肝心な情報への最後のクリックをしたら、広告に行き当たったり、人生古いようなものが出てきたりします。また治療法について、デメリットはほとんど書かれていないのです。またあるいは、どんどん症状が悪くなる様子が書かれているサイトに当たると、涙が止まらなくなったり、やる気が出なくなり1日棒に振ったりします。

乳がんになって日々、悩みが多いのですが、こうしたあふれる情報を得るのも、得ないのも私の選択です。どこまで信じるか、信じたらどの程度まで行動を具体化するのか、すべては私の判断です。結果がよくてもそうでなくても、選んだ私の責任なのです。だってかけがえのない私の体のことですから。

自由に情報にアクセスできる、ということは、その先の選択に自分で責任をもたねばならない、ということでもあるのです。私は私であり続けるために、自らの責任において、自分の選択を積み重ねています。

### 3.2.2 授業の流れ、構成の提案

◆**主題名** 選ぶこと、責任をもつこと

◆**教材名**

1 読み物教材「不安を消すもの」

2 「がん教育推進のための教材 補助教材」スライド教材モジュール6の5, 6枚目

◆内容項目 A1 自主, 自律, 自由と責任

◆ねらい

- 1 女性特有のがん患者とその人が抱える悩みについて知ること、それに答える難しさも理解できる。
- 2 インターネットの利便性と短所を知ること、日頃のスマートフォンの扱い方や情報への態度を振り返り、よりよいかかわりについて自分の意見をもつことができる。

◆導入

事前学級アンケート「自分のいのちに関わる情報にはどのようなものがありますか」「乳がんについて知っていることを書いてください」の結果を伝える。学習を方向づける記述をした生徒を指名して、意見を求めたり、記述内容を説明してもらったりする。

◆展開

- 1 学習課題「病気になったとき、情報をどう利用するとよいだろうか」を提示する。
- 2 教材を範読する。
- 3 登場人物および教材の内容の確認をする。
- 4 課題について話し合う。

【発問1】乳がんとは一般とで、患者の悩みとして同じものと違うものは何だろうか。

(補助発問：発問1にあたる記述を教材から抜き出し、指名して説明を求める)

【発問2】「よく似た症状の人の体験談を見つけると安心できる」のはなぜだろうか。

(補助発問：知らない土地に着いたとき、どんなことに不安を感じるだろうか)

【発問3】(乳)がんの患者にとって「私が私であるために」とは、どんな意味が込められているのだろうか。

(補助発問：)「かけがえのない私の体」とはどんなことを指しているだろうか。

【発問4】自分の日々の情報との向き合い方を振り返って気づくことは何だろうか。

(補助発問：正しい情報を得るために大切なことは何だろうか)

◆終末

- 1 説話を行う(乳がん患者の情報への切実感をまとめて確認する。スマホに頼る気持ちに共感しつつ、生徒たちのアクセスの切実度や実際の使い方について振り返りを促す。スライド教材モジュール6の5, 6枚目を映写し、説明し、情報の正確さを担保するスマホ以外の方法に目を向けさせる)。
- 2 授業の感想をワークシートに書かせる。

◆評価

- 1 乳がん患者の悩みを知ること、情報の大切に気付くことができたか。(発問1と2に対する発言内容とワークシートへの記述内容から)。
- 2 情報にまつわる自由と責任について、自分の様子を振り返って考えることができたか。(発問3と4に対する発言内容とワークシートへの記述内容から)。

#### 4. 今後の課題

教材は、繰り返し授業実践を行い、手を入れることで完成する。そもそも相当な時間を要する。それだけ生徒の実態に合わせたり、ねらいとする価値を高めるのに十分な内容にしたりすることが難しい。さらには、内容項目の解説に記された道徳的な価値を含む教材提案に専心するあまり、例えば、文科省による「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」<sup>33)</sup>との関連性や整合性について、本稿では言及していない点にも表れている。授業の実践において、学級の実態を勘案して用いていただくことは、ごく当然のことと理解している。不十分なままであるが、ここに公開することで、ご批判をいただき、実践研究と手直し、改良をとまに行っていただけの諸氏の出現を期待する。

#### 注

- 1) 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)がん情報サービス(国立研究開発法人国立がん研究センター)「1.最新がん統計のまとめ」[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 2) 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)がん情報サービス(国立研究開発法人国立がん研究センター)「2.がんの罹患(新たにがんと診断されること)」[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 3) 例えば「総合的な学習の時間」の調べ学習や探究のテーマとして、学級全体のものを「がん」と定めつつ、全体での乳がんに関する学習を挿入する。そのことで男女別の課題、あるいは選択制の課題として個々に、グループで学ぶ場を設けやすくなることが想定される。選択制の学習活動後に、学んだ内容を伝え合う活動を行えば、効率よく両者について学ぶことができるだろう。
- 4) 無論、男性の乳がんも存在する。しかし罹患率が極めて低い。学校教育におけるがん教育では、まず女性の乳がんへの理解を促進する必要があると考えられる。その点から本稿では扱わない。なお「男性乳がん」は「希少がん」として位置付けられている。国立がん研究センター希少がんセンター「さまざまな希少がんの解説」「男性乳がん」(公開日：2021年1月19日、更新日：2021年4月8日) Available at : Available at : [https://www.mext.go.jp/content/20210310-mxt\\_kenshoku-100000621\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210310-mxt_kenshoku-100000621_2.pdf). Accessed October 26, 2021
- 5) 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)がん情報サービス(国立研究開発法人国立がん研究センター)「2.がんの罹患(新たにがんと診断されること)」[https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html) なお同じURL内には「用語集」と題するバナーが準備されている。「累積罹患リスク」の詳細は参照のこと。
- 6) がんは高齢になるほど罹患率が高くなる。つまり高齢者が多い集団は高齢者が少ない集団より、単純な罹患率が高くなってしまふ。その点で年齢調整罹患率も参照する必要がある。その点やデータは、後述される。
- 7) 罹患率の高さをもって教材化を進めるとすれば、指導者は生徒の家族や知り合いの中に、その病気に苦しむ人やそれが原因で亡くなった人がいるであろうことに、よく留意する必要がある。例えば以下を参照したい。文部科学省「外部講師を用いたがん教育ガイドライン 平成28年4月(令和3年3月一部改訂)」 Available at : [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/16/1369991.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2016/06/16/1369991.pdf). Accessed October 26, 2021

- 8) 文部科学省「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」, p. 3 Available at : [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf). Accessed October 26, 2021
- 9) 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）がん情報サービス（国立研究開発法人国立がん研究センター）「4.がんの生存率」 [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 10) 阿部恭子・矢形寛編2017, 「乳がん患者ケアパーフェクトブック」学研メディカル秀潤社, p. 92
- 11) 文部科学省「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」, p. 2 Available at : [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf). Accessed October 26, 2021
- 12) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）」, p. 127
- 13) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）」, p. 129
- 14) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編」東山書房, p. 216
- 15) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）」, pp. 154, 155
- 16) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」教育出版, pp. 40, 41
- 17) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」教育出版, p. 25
- 18) 文部科学省, 「第3章 道徳」「中学校学習指導要領（平成20年告示）」 Available at : <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h19/chap3.htm>. Accessed October 26, 2021
- 19) 中央教育審議会, 「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」, p. 10 Available at : [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf). Accessed October 26, 2021
- 20) 文部科学省, 「中学校学習指導要領解説 道徳編（平成20年告示）」, p. 48 Available at : [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912\\_012.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_012.pdf). Accessed October 26, 2021
- 21) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」, p40 教育出版
- 22) 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）がん情報サービス（国立研究開発法人国立がん研究センター）「年次推移」 Available at : [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/annual.html#anchor1](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html#anchor1), Accessed October 26, 2021 なお出典の表の見出しの「罹患」にアスタリスクがマークされている。その点について同URL中に、以下の但し書きが付されている。「罹患データは、年次推移の検討を目的として、山形・福井・長崎の3県のデータを合わせて、実測値として集計したものです。これらの3県の地域がん登録は、長期的に登録精度が高く安定しているため、登録精度の変化が罹患率の増減に及ぼす影響が小さいと考えられます。また、主要な部位のがんの増減について、これら3県を合わせたデータの日本全体への代表性が確認されています。」
- 23) このことが、いわゆる「コロナ禍」で耳にすることがあった「正しくこわがる」といったことと同じかどうかは判断を留保したい。そもそも「正しくこわがる」ことが実現できるか懐疑的である。さらには「こわがる」部分の指示内容が、不明確なままで拡がっている印象はないだろうか。Covid-19の感染終息後に、この表現に定義が与えられるのか、またどのように語られていくのかには、学校教育の観点から改めて注目していくべきだろう。
- 24) 阿部恭子・矢形寛編2017, 「乳がん患者ケアパーフェクトブック」学研メディカル秀潤社, p. 2
- 25) 阿部恭子・矢形寛編2017, 「乳がん患者ケアパーフェクトブック」学研メディカル秀潤社, p. 4
- 26) 文部科学省「がん教育推進のための教材 補助教材」 Available at : [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/1385781.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1385781.htm), Accessed October 26, 2021
- 27) しかしこのことは、「問題が女性ゆえ」ということが浮き彫りなれば、例えば家族内の、あるいは社会的な役割等に関する問題なら、必ずしも患者の患部が乳房でなくてもよいことにもなる。

- 28) 岩井ますみ2015, 「働く女性のためのがん入院・治療生活便利帳 40代, 働き盛りでがんになった私が言えること」講談社, pp. 189, 190
- 29) 「令和3年度がん教育総合支援事業委託 がん教育共有サイト」 Available at :<https://www.gankyoyouiku.mext.go.jp/#symposium>, Accessed October 26, 2021
- 30) 橋爪可織ら2019, 「乳がん患者のインターネットからの情報利用における利点および困難とその対処方法」長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻『保健学研究』, 第32号, pp. 81, 82
- 31) 唐鈺穎ら2021, 「乳がん患者の心理状態と家族機能が子どものQOLに与える影響(乳がん患者の家族機能が子どもに与える影響)」, 日本緩和医療学会『Palliative Care Research』, 第16巻2号, pp. 175, 176
- 32) 文部科学省2017, 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編」, 教育出版, p. 53
- 33) 文部科学省2016, 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る, 児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」 Available at : [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/04/\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf). Accessed October 26, 2021

## 参考文献

- 愛知県がんセンター病院「乳がん」 Available at :[https://www.pref.aichi.jp/cancer-center/hosp/12knowledge/iroirona\\_gan/07nyu.html](https://www.pref.aichi.jp/cancer-center/hosp/12knowledge/iroirona_gan/07nyu.html), Accessed October 26, 2021
- 天野幸輔2006, 「4名の乳がん体験者の語りに耳を傾ける授業」, 立松喜男・松原好広『中学校「生命の教育」の実践 ～道徳授業を核として～』, 明治図書, pp. 131-142
- ブライアン・フィース著 高木萌訳2018, 「母のがん」, ちとせプレス
- 千葉敦子1987, 『乳ガンなんかには負けられない』, 文春文庫
- 千葉敦子1989, 『寄りかかっては生きられない—男と女のパートナーシップ』, 文春文庫
- 千葉敦子1989, 『死への準備』日記』, 朝日文庫
- 岩井ますみ2015, 『働く女性のためのがん入院・治療生活便利帳 —40代, 働き盛りでがんになった私が言えること—』, 講談社
- 川端博子ら2021, 「インターネットショッピングサイトの情報分析による乳がん専用ブラジャーの販売実態と課題」, 日本家政学会『日本家政学会誌』, 第72巻1号, pp. 25-35
- 近藤茉莉依ら2018, 「挫折経験から立ち直りまでのプロセス —立ち直りを促進する要因の検討—」, 『横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集』, 第18号
- 名古屋市立大学編2021『子育て世代が知りたい子どもの病気やライフステージの話 名市大ボックス7』, 中日新聞社
- NHKエデュケーション2013, 「NHK健康番組DVD100選 きょうの健康 進む乳がん治療 —個人個人に合った治療法を知り, 自分らしい人生を送るための選択を—」, NHKエンタープライズ
- 杉本美希ら2021, 「乳がん患者の化学療法誘発性末梢神経障害と身体活動および生活の質の関連」, 日本がん看護学会『日本がん看護学会誌』, 第35巻
- 淀川キリスト教病院ホスピス編1992, 『ターミナルケアマニュアル 第2版』, 最新医学社